

論文要旨

テキスト言語学の観点からみた中国語におけるテキストの結束性 —二つの非明示的表現を中心に—

譚 昕

本論文は、現代中国語におけるテキストの結束性について、二つの非明示的表現である「ゼロ照応」と名詞性要素“X 的 Ø”を中心に考察し研究を行ったものである。

本論文は以下のとおり、3部7章から構成されている。

まず、第1部は本論文の研究の概観であり、第1章と第2章からなる。

第1章序論では、本論文の研究目的、研究方法および本論文の構成について説明した。

第2章では、本論文が分析上の羅針盤である理論的枠組みについて、テキスト言語学の理論の一つである Halliday&Hasan(1976)と Halliday(1994)の結束性理論を用いることを示した上、本論文で使用される基本的な諸概念である「テキスト」、「結束性」、「ゼロ照応」、「節」、「文体」および“X 的 Ø”の定義について、先行研究の観点を踏まえながら、整理し明確に示した。さらに、本論文における研究分析の視点と分析の方法論の必要性について説明した。

次に、第2部は本論にあたり、二つの非明示的表現である「ゼロ照応」と“X 的 Ø”の振る舞いを中心に、主に Halliday&Hasan(1976)と Halliday(1994)の結束性理論を用いて、中国語におけるテキストの結束性について具体的考察を行った。第3章、第4章、第5章及び第6章からなる。

第3章では、一つ目の非明示的表現、テキストの指示機能を持つゼロ照応について考察した。まず、中国語のゼロ照応に関する先行研究を概観した上で、マクロ的分析観点を基にし、北大コーパスより収集したデータを分析材料とし、ゼロ照応が持つ全体的かつ基礎的な特徴を考察した。その次に、ミクロ的分析観点を基に、中国語小説《倾城之恋》を分析の材料とし、同じ指示機能を持つ三人称代名詞との相違についてさらに深く掘り下げて、考察を行った。結果、中国語では節頭主語に関して、ゼロ照応より三人称代名詞のほうが、テキストを結束する力はより強いと、先行研究と異なる結論に至った。

第4章では、中国語と異なる言語にも目を向けて対照研究することで、中国語におけるゼロ照応の振る舞いの特徴がより明確に示せるという出発点から、日中両言語における節頭主語のゼロ照応について、比較しながら考察を行った。分析の材料として、中国語小説《倾城之恋》とその訳本、日本語小説『飼育』とその訳本の4本の小説を用いた。結果、中国語における節

頭主語のゼロ照応の使用は、必ずしも日本語より少ないとは言えないと、先行研究と異なる結論に至った。また、日本語に比べると、中国語の三人称代名詞はテキストにおいて、関連詞的働きを有し、テキストを結束する機能がより強くより明らかであると考えられた。

第5章では、二つ目の非明示的表現、名詞性要素“X 的 Ø”に対して、その定義を明確にした上、先行研究の諸観点を整理し概観した。さらに、以上の先行研究に見られた3つの問題点を改めて呈示した。

第6章では、第5章で提示した“X 的 Ø”要素に関する問題意識を解明するため、分析の理論的枠組みである Halliday&Hasan(1976)と Halliday(1994)の結束性理論を用いて、中国語のテキストにおける“X 的 Ø”の振る舞いについて考察を行った。考察の結果として、“X 的 Ø”要素はテキストにおいて、代用機能を有しており、テキストの結束性をもたらす働きをもつという結論に至った。また、Halliday&Hasan(1976)が示した結束性の表し方ではないが、“X 的 Ø”が持つ例示的な働きは、同じくテキストを結束させる機能であることから、本論文では、結束性の新たな表し方として、「例示」機能と名付けて提案を行った。一方、非明示的表現“X 的 Ø”が持つ文体的特徴について、話し手の意図による強調、および話し手の感情的色彩を表す働きを有していることから、“X 的 Ø”表現は話し手の主観性を表すことができるという結論に至った。

最後に、第3部は本論文における研究の結びをなす部分であり、第7章からなる。

第7章では、全体の総括として、内容の振り返りをした上、本論文で提示した諸問題についての私見を述べた。また、今後の研究に向けて残された課題を取り上げた。